

浜の仲間が
災害の経験を未来に
伝える

命 の 声

浜の仲間が
未来の災害への備えを
受取る

令和8年3月

全国共済水産業協同組合連合会
(JF共水連)

命の声とは

過去に起こった様々な大規模災害等
 (地震・津波、台風、海難事故)から、
 自らの「命を守った」JF組合員等の体験や教訓を
 『命の声』としてお聞きし、
 全国のJF組合員や漁村地域で暮らす
 皆さまに伝える情報誌です。

『命の声』は、
 「声を頂く方」と「声を受け取る方」の助け合いです。

災害の経験を伝える

- 東日本大震災
- 地震・火災
- 台風災害・河川氾濫
- 海難事故……

未来の災害に備える

- 南海トラフ大地震
- 北日本太平洋沖地震
- 台風災害・河川氾濫
- 海難事故……

目次

兵庫県

JF浅野浦 代表理事組合長
 河野 秀二郎さん 3

全国共済水産業協同組合連合会 代表理事副会長
 JF明石浦 代表理事組合長
 戎本 裕明さん 4

北海道

JFひやま 共済推進委員長
 奥尻町議会 議長
 水野 諭さん 5

JFひやま 総代
 指導漁業士
 小濱 洋介さん 6

JFひやま 奥尻支所長
 坂本 治広さん 7

ご注意ください重大なこと

『命の声』は、全ての災害や事故に共通する
 災害避難方法ではありません。
 「声」を寄せていただいた方の実際の体験をお伝える
 「一つの事例」であることをご理解された上で
 ご自身の判断の参考にしてください。

「すべてを放り出し、命を守る行動を」



JF浅野浦 代表理事組合長
かわの ひでしろう
 河野 秀二郎 さん



▲阪神・淡路大震災
 (斗ノ内地区)
 (提供:北淡震災記念公園)
 ◀北淡震災記念公園
 野島断層保存館「野島断層」

漁をやめることも考えた

今から30年前、父と兄の三人で海苔漁をしていました。阪神・淡路大震災があった日、私は遅番で朝5時半頃に起床。布団を出ようとした瞬間に「ドンッ」とびっくりするような音で下からの突き上げがあり、その後激しく横に揺さぶられました。テレビを付けると、大きな地震を知らせるテロップが出ていました。すぐに家族を安全な場所に避難させ、父や兄がいる海苔納屋(加工場)に向かいました。

納屋に着くと、活性タンクに入れていた大量の海苔があふれて散乱し、一帯が真っ黒に。屋内では調合機(海苔の厚さを調整する機械)が倒れ、乾燥室とバーナーの間には50センチほどのすき間ができていました。両親や兄に大きな怪我はありませんでしたが、バーナーが燃え、火事が起きていたら大惨事になっていたと思います。自宅であればさまざまな防災対策ができますが、納屋には大型の機械や特殊な設備が多く、対策の難しさを感じます。



浅野浦は、島内でも特に被害の大きな地域でした。道路は亀裂まみれで、溝にはまって立ち往生する車を何台も目にしました。みんなパニックになっていたのだと思います。陸にあげていた約30隻の底引き船がすべて横倒しになっている光景には我が目を疑いました。ほとんどの納屋が被災し、稼働できなくなったため、養

殖中の海苔は刈って処分し、海に張った網も一旦撤去しました。海苔のシーズンはまだこれからでしたが、**あまりの被害の大きさに「今年には漁をやめる」という話も出ました。**しかし最終的には続けることで意見がまとまり、浜の仲間で協力し合って何とか再開にこぎ着けました。

震災を機に高まった防災意識

震災の前後で大きく変わったことがあります。それは防災に対する意識です。震災をきっかけに、家族や漁師同士で地震について話す機会が増えました。淡路島は2013年4月にも大きな地震(震度6弱)に見舞われましたが、多くの住人が震災を経験していたため、慌てることはありませんでした。

災害から命を守るために大事なものは、場面場面に応じてどう逃げるかを考えておくこと。それしかないと思います。夜に沖に出ることもある漁師は特にそうです。浅野浦の場合、漁場から網をあげて港に帰ってくるまでに1時間前後かかります。沖で地震が起きた際、津波が到達する前に港に戻るのか。戻らずに水深の深いところへ逃げるのか。命を守ることを最優先に考え、適切に行動しなければなりません。

陸にいるときも同じです。船が心配な気持ちも分かります。しかし私は、息子や娘から言われた「絶対に船の様子を見に行っちゃいけない。死んでしまうで」という言葉を守ると心に決めていました。震災当時は津波に対する危機意識がまだ低く、船や岸壁の様子を見るために多くの人が浜に集まっていた。もし津波が来ていたら、全員亡くなっていたでしょう。大震災を経験した当事者の一人として、「家や仕事をすべて放り出しても、自分の命を守ることを考えて行動してほしい」と、皆さんに伝えたいです。

災害の記録

「阪神・淡路大震災(淡路島)」

神戸市や芦屋市のほか、淡路島北部の一部地域でも震度7に達した。北淡、津名、淡路、一宮、東浦からなる津名郡5町(現・淡路市)の人的被害は1200人以上。住家被害は約1万7千戸に上った。なかでも

震源に近い北淡町は、約9割の家屋が倒壊・損壊するなど壊滅的被害を受けた。

淡路島では平成25年(2013年)4月13日にもM6.3の地震が発生し、淡路市で震度6弱を記録した。

『備え』と『助け合い』が大切



全国共済水産業協同組合連合会 代表理事副会長
JF明石浦 代表理事組合長

えびす もと ひろ あき
戎本 裕明 さん



▲海苔の乾燥機
◀漁家台帳をもとに、組合員の居住地が一目で分かる地図を作成している戎本さん

船体が大きく持ち上がった

夜明け前、箱船に乗って海苔の収穫をしているときに、阪神・淡路大震災が起きました。船体がググッと大きく持ち上がり、スクリュウが付いていないにも関わらず何かを巻き込んだような感覚がありました。しばらくすると無線の声が騒がしく聞こえてきましたが、「どこかで船の事故があったのだろうか」と気になりながらも作業を続けました。刈り取りを終えて箱船から船に戻ったとき、電話が鳴りました。「地震や、早く帰ってこい」。そこで初めて、兵庫県南部で大きな地震があったことを知りました。

沖から陸を目指す途中、印象に残った光景があります。空が白むなか、明石西部を境にして姫路方面は明るく、神戸方面は真っ暗で、地震による停電の境目をはっきりと見て取ることができました。遠目には建物の倒壊はなく、最初の印象は「被害はそんなに大きくない」でした。しかし港に入った瞬間、大勢の人が毛布をかぶってたたずんでいる姿を目にして、事の大きさを実感しました。家族の無事を確認した後、加工場に行く、海苔の原藻が入ったステンレス製タンクがいくつも倒れ、乾燥機が横に大きく移動していました。その他の漁業関連施設も被災し、使用できなくなりました。現在の漁協の建物やセリ場は震災の年に新たに建てたものです。



災害の記録

「阪神・淡路大震災（阪神地域）」

平成7年（1995年）1月17日5時46分、淡路島北部を震源とするM7.3の地震が発生。国内で史上初めて「震度7」の揺れを観測した。都市部での直下型地震であったため、6400人以上の方が亡くなり、

「近くで寄り添う」が原点

各地で頻発している自然災害から命を守るためには、「備え」と「助け合い」が大切です。明石浦は長い間、高潮対策が未整備でした。しかし2011年の東日本大震災、2013年にフィリピンで約8000人もの死者・行方不明者が出た台風30号などを経て、50年間進まなかった防潮堤建設への機運が高まり、2018年に着工、3年後に完成しました。

ソフト面の対策では、全組合員に防災リュックを配付しました。また、漁家台帳をもとに、組合員の居住地が一目で分かる地図も作成しています。共済事業としての「浜のあんしんサポート運動」は、組合員とその家族の状況を丁寧に把握し、有事の際の「助け合い」に繋げる有意義な取り組みだと考え、実践しています。

昔と比べて近所同士の結びつきが希薄になりつつあるからこそ、私たち漁協が持てる力を発揮し、地域の核になるべきです。そうした考えのもと、助け合いの輪を、浜の仲間を超えて地域全体に広げる活動にも注力しています。町内会や小学校の行事に参加したり、合同で防災訓練を実施したり、地道な活動を通じて地域と漁協の距離はだいたい縮まったと感じています。「近くで寄り添う」というのは協同組合の原点です。また、明石浦のセリ場には女性も多く、協力しながら仕事をしています。これも協同組合のあるべき姿だと思います。いざというとき、事前の「備え」と日々の「助け合い」が必ず役に立つはず。

震災から30年が経ちましたが、被災当時の記憶や危機意識が薄れることなく、「災害が起きたときにどうするか」を常に考えています。これからも地域に貢献しながら、「備え」と「助け合い」の大切さを伝え続けていきたいと思っています。

約25万棟の住宅が全半壊するなど、その被害は甚大かつ広範囲に及んだ。目立った津波は報告されなかったが、港湾施設や河川構造物が被災し、漁業にも深刻な被害をもたらした。

「思い込みによる行動は危険」



JFひやま 共済推進委員長
奥尻町町議会 議長
みずの さとし
水野 諭 さん



▲津波によって崩れたのり面と災害後に建てられた仮設住宅(稲穂地区)
(提供:奥尻町教育委員会)
◀賽の河原 慰霊碑

■先入観を持ってはいけない

地震の翌日、7月13日はアワビ漁の最終日でした。早朝からの漁に備えて早めに就寝しようとしたところ、大きな揺れに襲われました。そのときに真っ先に思い出したのが、10年前に起きた日本海中部地震です。秋田・青森県沖を震源とするマグニチュード7.7の大地震で、奥尻島にも津波警報が発令されました。だから今回も「地震の後には必ず津波が来る」と思い、すぐに家族を近くの高台に避難させました。

その判断は適切でしたが、ひとつ反省すべき点があります。10年前の大地震で奥尻島に津波が来たのは、揺れが収まってから約30分後だったため、「今回もそうだろう」と決めつけてしまったのです。「船の様子を見に行く時間は十分にある」と考えた私は、自宅から港に向かおうとしました。当日は快晴で、月の明るい夜でした。ふと海の方に目を向けると、白い波が押し寄せてくる様子をはっきりと



見えて、慌てて高台に逃げ戻りました。もし月明かりがなければ白波に気づかず、港に下りて津波に飲み込まれていたでしょう。過去の自然災害の経験から学ぶことは大事ですが、先入観を持って行動してはいけない。これが、私が皆さんにお伝えしたい「命の声」です。

避難先の高台で不安な一夜を過ごしました。月明かり

のなか、漁港に係船していたイカ釣り船が沖を漂う姿が見えました。自分の船だと分かっても何もできず、ただ眺めるほかありませんでした。建物が崩れる音や海に流される音も聞こえてきました。私が住む稲穂地区には50～60軒ほどの建物がありましたが、自宅も含めて壊滅状態。残ったのはわずか数軒でした。翌日になって、崖崩れや火災など他地区の被害の様子も知りました。港に船の様子を見に行き、亡くなった方も多く、とても心が痛みます。私も同じように被害にあっていたかもしれないと思うと恐ろしくもあります。

■各家庭で防災用品や避難ルートを準備

奥尻島のような小さな島では、交通インフラに被害が出ると生活物資の供給が途絶えてしまいます。北海道南西沖地震のときも物流に大きな支障をきたしましたが、震災の数日後に、対岸の江差町や乙部町から漁師仲間が水や食料、燃料を運んできてくれたのはとてもありがたかったです。

地震を機に、島民の間で備蓄に対する意識は高まったように思います。震災直後には、高台に簡易な小屋を建て、そのなかに水や食料を保管するなどの対策がとられました。現在は自宅での備蓄が中心で、親戚や知人の家を訪れると、玄関先に防災用品が準備されているのによく見かけます。

「備え」という点では、避難場所までのルートを事前に確認・確保しておくことも重要です。震災復興に伴い、行政が避難用の道路を建設してくれましたが、それとは別に、自宅から最短で安全な場所へ逃げられる避難ルートを準備している家庭も多いです。自宅の裏山に続く獣道の草刈りを定期的に行い、もしもの際に逃げやすいようにしているという話も耳にします。我が家では、稲穂灯台が建つ岬の高台に逃げることを家族で決めています。

災害の記録

「平成5年北海道南西沖地震」

7月12日22時17分、北海道奥尻島沖で起きたM7.8の大地震。日本海側を震源とする地震としては近代以降で最大規模となった。

震源から近かった奥尻島には、大津波警報発令前に津波が到達。西

部の藻内地区、南部の松江地区や青苗地区を中心に甚大な被害をもたらした。北部の稲穂地区では、数軒を残し、ほとんどの建物が倒壊・流出した。島全体の人的被害は300人以上、住家被害は1,000棟以上に及んだ。

「災害の教訓を後世につなぐ」



JFひやま 総代
指導漁業士
こはま ようすけ
小濱 洋介 さん



▲地震後の津波と火災で焼け野原になった青苗地区
(提供：防災システム研究所、撮影：山村武彦氏)



◀地震で火災が発生した青苗地区
(提供：奥尻町教育委員会、撮影：鎌倉照夫氏)

何としても子どもは守る

北海道南西沖地震のとき、私はまだ中学生でした。2階の自室で寝ていたところ急な揺れに驚いて飛び起きましたが、散乱した物に阻まれて、しばらく身動きが取れませんでした。どうにか部屋の外に出て、1階にいた家族と無事を確認しました。揺れの次に警戒すべきなのは津波です。自宅は高台にありましたが、より高い場所を目指して車で避難しました。

私たちが自宅で被災したちょうどその頃、漁師である父親は沖でイカ釣りをしていました。海にいても地震があったことが分かるほど、船が大きく揺れたとのこと。7月はイカ漁の最盛期。陸から遠く離れた奥尻海峡の真ん中あたりで漁をしていたため、津波に巻き込まれずに済みました。沖から奥尻島の方角を見ると、停電で町の明かりは消えていたものの、青苗地区で起きた火事で空は真っ赤に染まっていたそうです。昭和58年に日本海中部地震を経験して

いる父は、家族や島内の様子が心配で、すぐに港に戻ろうとしました。しかし潮位の変動が大きく、船を着けることができず、港に入れたのは夜明けを過ぎてからでした。

津波の被害が特に大きかったのは、島南西部の藻内地区で、最大約30cmの津波が押し寄せたとされています。藻内地区から少し北にあるホヤ岩近くで民宿を営んで

いた祖父母は津波で亡くなりました。後日現地を訪れた際、民宿の建物は跡形もなくなり、電線に海藻が引っ掛かっている光景を目にして、津波の脅威をまざまざと実感しました。

あれから30年以上が経ち、私も子どもを持つ親になりました。阪神淡路大震災や東日本大震災など大きな地震が起こるたびに昔の記憶がよみがえり、「家の中にも決して安全ではない」「何としても子どもは守る」と、気持ちが引き締まります。

さり気なく伝える防災の心得

日本海中部地震と北海道南西沖地震。奥尻島は10年間で二つの大きな地震と、それに伴う津波に見舞われました。その経験と教訓を生かすために、島の小学校では子どもたちへの防災教育が行われています。令和6年の能登半島地震の際、この辺りにも津波注意報が発令されたのですが、小学生の娘は率先して荷物をまとめ、逃げるための準備を始めました。「地震が起きたらすぐに安全な場所に避難する」という意識・習慣が身につけているからこそその行動だと感心しました。

学校の教育が行き届いているため、私から娘に対し、あらためて防災の話をすることはありません。しかし、例えば散歩の途中に「この山の上では山菜が採れるよ。近くで地震があったら、そこに逃げるといいよ」といったアドバイスを時折しています。

津波から命を守るためには、絶対に海に近づかないこと、そしてできるだけ高い場所に逃げるのが大切です。普段からの備えと心構えがあれば、災害発生時に適切な対応ができます。そうしたことを堅苦しくではなく、日常生活のなかでさり気なく娘に伝えるようにしています。その繰り返しが、災害の教訓を後世に伝えていくことにつながるのだと思います。



災害の記録

「平成5年北海道南西沖地震(奥尻島東部)」

地震直後、奥尻港フェリーターミナル裏手の観音山で大規模な崖崩れが発生した。フェリーターミナルは奥尻島の海の玄関口にあたり、周囲にはホテルやレストラン、灯油の備蓄タンクなどがあった。それらが

一瞬のうちに土砂に飲み込まれ、島外の宿泊客をはじめ29人の命が奪われた。

その場所から程近い赤石地区でも、漁港が損壊するなどの被害があり、住民の生活に大きな影響を及ぼした。

「災害は忘れた頃にやってくる」



JFひやま 奥尻支所長
さか もと はる ひろ
坂本 治広 さん



▲津波で漁船が陸に打ち上げられた(青苗地区)
(提供:奥尻町教育委員会、撮影:鎌倉照夫氏)

▲緊急避難用高台 人工地盤「望海橋」

紙一重で命が助かった

地震のあった夜は、自宅で友人と電話をしていて、大きな揺れを感じたと同時にぶつりと通話が切れてしまいました。子どもの頃に日本海中部地震を経験していたため、「大きな地震の後には津波が来る」という認識がありました。すぐに車を出して、近所に住む両親を迎えに行き、高台の姉の家へ送り届けました。これは後から知ったことですが、自宅から直接姉宅へ向かう道は地震後まもなく津波に飲み込まれたそうです。両親宅を経由したことで被害にあわずに済みました。まさに紙一重のところで命が助かりました。

私たちが暮らす青苗地区では火災も発生しました。地震に伴って出火した炎は、翌朝に鎮火するまで広範囲に燃え広がり、自宅も燃えてなくなりました。煙をあげる町の様子を見守ることしかできず、やるせない気持ちでいっぱいでした。

津波により、漁業も大きな被害を受けました。イカ釣りで沖に出

ていた船は無事だったのですが、それ以外の船や漁具の多くは流されてしまいました。漁業関連施設も損壊したため、漁を再開したくても荷受けする場所がない。仮に荷受けできたとしても今度は商品を輸送する手段がありません。そうした問題が解決するまでの間、漁はしばらく休業していたと記憶しています。



組合の建物も被災しました。その頃の私は入職2年目の若手職員で、耐火金庫に保管していた重要書類を探したり、整理したりすることが当面の仕事でした。先輩たちは島内の各地区をまわって、被害状況の調査や漁業者との面談に奔走する日々でした。

災害に強い漁港づくりを目指して

津波と火災で壊滅的な被害を受けた青苗地区では、その後、災害に強い漁港づくりを目指してさまざまな施設が整備されました。その一つが青苗漁港に建造された「人工地盤」です。高さ約6m、全長約160mにも及ぶ巨大な避難用高台で、漁港で働く漁業者が迅速・安全に避難し、津波から身を守るために活用されています。地震から8年後の2001年には、島南部の徳洋記念緑地公園内に奥尻島津波館が完成。こちらは、震災の記憶と教訓を後世に伝えるための施設として、島内の子どもたちの防災学習などに役立てられています。

北海道南西沖地震は、日本海中部地震の10年後に起きました。被災後しばらくは「10年周期で大きな地震が来る」と警戒感を強めていましたが、あれから30年以上が経ち、その気持ちもだいぶ薄れてしまったように感じます。私自身も日常生活のなかで災害を特別意識することはありません。しかし、津波や崖崩れのあった道路を車で走っているときに、「今地震がきたらどうしよう」と不安がよぎることがあります。長い間地震がなかったからと言って、この先も絶対はないとは限りません。忘れた頃にやってくるのが地震の怖いところです。震災の記憶は風化していきます。だからこそ、対策や準備をしておくことが重要だと考えます。そしていざ災害が起きたときには、自分と周りの人の命を第一に考えて行動してほしいと思います。

災害の記録

「平成5年北海道南西沖地震(奥尻島南部)」

奥尻空港から程近い青苗地区は、津波と火災の影響により、島内で最大の被害を受けた。地震直後に発生した火災は、翌朝鎮火するまで10時間以上、広範囲にわたって延焼。焼損面積は約19,000㎡、焼損

棟数は180棟以上に及んだ。

島南端のエリアは津波により完全流出した。現在は緑地公園として整備され、園内に建てられた奥尻島津波館が津波の恐ろしさと教訓を後世に伝えている。



『命の声』第4号

- 発行 全国共済水産業協同組合連合会 (JF共水連)
<https://www.kyosuiren.or.jp/>
- 取材協力: 株式会社 毎栄



Z000004 (2026.3.毎.8,000)